

NEWSLETTER

生態人類学会

ニュースレター
No.14 [別冊]

THE SOCIETY FOR ECOLOGICAL ANTHROPOLOGY

2009年3月10日発行

特集 鈴木継美氏 追悼

鈴木継美先生とニューギニア

秋道智彌

総合地球環境学研究所

大塚柳太郎さんをリーダーとするパプアニューギニアの西部州低地における調査に参加したのはいまから30年ほど前のことである。ポートモレスビーへはマニラ経由で飛ぶこととなった。マニラで1泊したさい、みんなで食事に繰り出した。その時にノギリガザミのボイルしたものを注文した。人数分、蒸したカニが運ばれてきた。若輩のわれわれがすぐに手を出すわけにはいかず、鈴木さんがまず上からカニをとりあげた。ここまでは教授と助手クラスとのつつましい関係となるのだが、悲劇はその夜に起こった。食中毒症状に先生がなった。われわれは大丈夫であったが、容器の上のほうにあったカニの加熱処理が十分ではなかったためとおもう。ニューギニア入りしても下痢はとまらず、おかゆづくりに精を出したことを覚えている。

ニューギニアの村では1週間ほどお付き合いをいただいた。食い意地を張ったわけではないが、サゴデンプンとイモだけの食事は腹持ちが悪く、ぼくは1週間に一度は持参したオーストラリア米をたらふく食べていた。お茶漬けのふりかけと醤油をぶっ掛けただけの白飯を食べて

いると、「栄養失調になるぞー」と注意された。

「おい、食うかい」と僕に日本から持参した羊羹をナイフで切って差し出され、その懐かしい甘さはいまも記憶に残っている。こと食べ物にはうるさい先生だとおもっていたが、食を専門とするのだから当然といえることかもしれない。

現在、ぼくは京都にある総合地球環境学研究所に勤めている。30年前とずいぶん時代は変わった。食の問題が地球環境問題としても取り上げられるようになった。しかし、栄養と健康、食の問題はむかしから生態人類学が取り上げてきたテーマであり、エネルギーとタンパク質の摂取量、微量元素の問題など、研究の基本はそれほどぶれてはいない。何回も論文内容できついコメントをいただいたことがいまに少しでも生かされるとしたら、それは先生の指導の賜物である。それにしても、カニの下痢は相当ひどかったにちがいない。持参した梅干を差し上げると、おいしそうに食べておられた先生のやせ我慢の顔が眼に浮かぶ。

千の風になって

稲岡 司

佐賀大学農学部人類生態

「もし鈴木継美先生がおられなかったら今の自分はない」と思う「先生の学生」は多く、第4

世代くらいまでいるのではないのでしょうか。第1世代が東大助教授までの学生、第2世代が東北大に行かれていた頃の(東大に残っていた人も含めた)学生、そして第3・第4世代が東大に教授で戻られてから10数年間の学生です。そんな全ての世代の「学生」が昨年5月、先生の訃報に接し、全国から集まりました。不遜ながらそこには同窓会の雰囲気があり、今にも先生が「よう」と片手を挙げて出てこられそうでした。あれからすでに半年以上が経ち、折に触れて先生が他界されたことを確認しているはずなのですが、全くその実感がありません。ある大先輩はそれを「加齢」と一笑に伏されましたが、本当に「千の風になって」おられるような気がしてなりません。

僕は第3世代の学生で、先生とは親と子ほど歳が離れていましたが、先生が東大に戻られたのと僕の修士入学が同じだったため、調子に乗って「同級生ですね」と言ったら即座に「そんなバカは取った覚えはない」と言われました。それでも、どうにか人類生態への出入りを許されましたが、今思えばその頃先生は「人類生態」の存在を内外に示し、研究の方向性を示された(絶えざる国際プロジェクトや内外研究者との交流、早くからの英語論文の作成など)のだと思います。教室は次第に活力を得てピリピリした雰囲気になっていきました。

博士課程に入るときにも僕の怠慢で一悶着ありましたが、何とか本当に「先生の学生」として取って戴きました。博士1年の時、先生のプロジェクトで初めてPNGに半年間連れて行って貰いましたが、そのうち1週間は先生と寝泊まりを一緒にしておりました。僕が寝ぼけて先生の脚をけ飛ばしてどやされたこと、先生が食いたいと言われたので貝を採って来てスープを作ったら、一瞥して「いらん」と言われたこと、また夕焼けを見ながら日本の歌謡曲のカセットテープを一緒に聴いたこと、先生が隠し持ってこられた羊羹をこちらから「甘い物は結構です」と

辞退したこと、などが思い出され、大変偉い先生でしたが、「学生」の前では何か人間臭いものが一杯あったなー、と今更ながらに思います。

熊大に助手の口がありそこに行くことになったときには、奮発して高いワインを持って行ったのに、一口飲んで「こりゃあまずい」と言われ、代わりに先生の部屋に置いてあったワインを出して下さって、「どうだ、旨いだろう」と言われたときには、本当に先生らしいものの大変複雑な思いでした。その後も、ずっと半人前の私を、影になって支えて下さったのを伝え聞いておりましたが、感謝の言葉を特には申し上げたこともありませんでした。佐賀に赴任する話があったときにも「自分の学生を早く持った方が良いぞ」と背中を押して下さいました。本当はもっといろいろお話したかったのですが、どうもレベルの違いを認識させられるようで、ついつい言いそびれておりましたら、今回のようなことになってしまいました。少しは孝行をしなければいけなかったのでしょうか、「おお気持ち悪る～」と言われるのが落ちだったのでしょうか、なくて良かったのかも知れません。先見えで達観し、ちょっと格好つけて頑固だったけど、ルールとマナーを重んじ、重厚で奥深いものが好きだった先生は、不肖の「学生」が困り迷ったときに「千の風になって」訪ねてきて下さるでしょう。その時には先生から「まあ、悪くないか」とでも言われるように、何とかやっていきたいと思っております。

「おっかない」人

市川光雄

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科

もう 35 年ほど前のことなので正確には思い出せないが、私がはじめて鈴木継美さんにお目にかかったのは、たしか、京都大学の理学研究科で行っていた修士研究を論文にまとめている頃だったと思う。詳しい経緯は覚えていないが、その少し前にスタートした「生態人類学研究会」が東京大学近くの学士会館(?)だったかであり、そこで発表することになった。きっとどなたかも書いておられると思うが、スタートしたばかりの生態人類学研究会は、当時、東大理学部におられた渡辺仁さん、東北大学におられた鈴木継美さん、そして京都大学理学研究科の伊谷純一郎さんが中心になって運営されていた。私は、伊谷さんに言われて、修士課程で調査した沖縄の珊瑚礁海域での漁撈活動について報告するため、夜行バスで東京に向かった。その発表の場で、私は、鈴木継美さんから、かなり厳しいコメントをいただいたのである。どんなコメントだったかという、私が発表の冒頭で、アメリカ人研究者の論文を引用して、調査村の漁撈活動が「delimitable」な生態的システムと形成していると述べたことに対して、鈴木継美さんが、それは市場の影響を受けており、delimitable とは言えない、と強い口調で指摘されたのである。あとで考えれば、delimitable とは delimited ではないから、外部の経済と切り離されているという意味ではなく、分析のレベルでは切り離して考えることができる、という意味だと強弁することもできたはずだが、このときはなにしろまだ駆け出しの研究者の卵、しどろもどろするほかなかった。そもそも、こんなアメリカ人の論文など引用して「権威づ

け」をする必要などなかったのである。しかし、同時にこのコメントがきっかけとなって、沖縄の辺鄙な珊瑚礁で行われている職人芸的な漁撈といえども、けっして外界から隔離されていたために残されたのではなく、押し寄せる市場経済の波のなかで漁民がさまざまな試みをしたあげくに活路を見いだした現代的な企てだという理解を得ることができた。それはともかくとして、このときのコメントの口調に気押されて、それからしばらくのあいだ、鈴木継美さんは「おっかない人」という印象が消えなかった。

その後、生態人類学研究会の前夜または直後に開催された囲碁大会で何度かご一緒させていただいたが、とうとう鈴木継美さんと対局(私ごときが、「対局」などと言ってはおこがましいか)する機会はなかった。それをなによりも残念に思っている。

鈴木継美先生と生態人類学

大塚柳太郎
国立環境研究所

鈴木先生との出会いは、私が東大理学系大学院(人類学)の修士課程に在学中の 1968 年に、医学部に新設された人類生態学教室が何をするとおろかを伺いに行った時である。これが縁で、1970 年に人類生態学教室の助手に採用されることになった。したがって、鈴木先生(以後、鈴木さん)は 40 年近く、時には上司として、時には研究の先達として、時には研究仲間として接してくださったことになる。

生態人類学研究会(学会の前身)との関係でいえば、鈴木さんは、伊谷純一郎先生、渡辺仁先生とともに 3 名の「長老」という位置づけになろう。この 3 先生は、研究歴や研究スタイルな

ど何をみても共通性よりは異質性のほうが顕著であった。異質な3長老の影響を受けた面々が、生態人類学研究会の立ち上げにかかわったのは幸運だったというべきであろう。

鈴木さんは、1955年に東大医学部を卒業すると同時に大学院に進み、公衆衛生学教室で職業保健・環境保健の研究を始めた。彼は優れた実験科学者であるとともに、フィールドワークが好きだった。ただし、公衆衛生学など社会医学のフィールドワークは、生態人類学で行われるものとはかなり異なっている。鈴木さん彼自身も、大学院生時代には有害化学物質の曝露が問題になっていた工場で、環境試料や生体試料の採取などを行っていた。そのようななかで、フィールドと実験室をつなぐ研究が重要で、人間の健康の理解は日常生活全般のなかでなされるべきと考えたようである。

1968年に人類生態学教室の助教授になり、人類生態学とは何をすべきかについて本格的な検討を始めた。渡辺仁、伊谷純一郎、泉靖一など、広義の人類学分野の先達が行ってきたフィールドワークに強い関心を持ち、地域社会でのフィールドワークが人類生態学の基本的な手法という結論に至ったのであろう。生態人類学を標榜する若い研究者が、さまざまな地域社会で観察を中心とする長期の調査をすることに対し、鈴木さんは驚嘆と賛美の眼差しで見えていたようである。しかし一方で、このような研究者がもたらすデータについて、とくにデータの核心性とか代表性にかんして、「正統な」科学者として途惑いを感じていたようにもみえる。

この小文は、私がおもった感覚的な印象を含めている。晩年の鈴木さんに、人類生態学そして生態人類学がどのような学問であるべきかを聞こうと常々考えていたのに、どのように切り出そうか迷っているうちに帰らぬ人になってしまった。

鈴木継美先生のことを偲ぶ

片山一道
京都大学

鈴木継美先生のことは、私どもの友人の間では10人中9人くらいの者が、あえて「つぐみ先生」、あるいは「つぐみさん」と呼んでいた。もちろん「つぐよし先生」よりも言いやすく、親しみが倍增するような感じなので、非礼を承知のうえ、私自身も「つぐみ先生」と呼ばせていただいていたような次第である。

鈴木先生が御逝去なされたことを奥様から葉書で知らされたとき、すぐに、壮年の終わりから熟年の頃の先生の顔が思い浮かんだ。御厚情をいただいたときの場面が去来した。それらは30年ばかりの時間の流れからよみがえったものである。もちろん「つぐみ先生」と私との間に直接の師弟関係などなかったから、また、さほど頻繁にお会いできたわけではなかったから、細くも長い繋がりではあった。それがまた、なんとも懐かしい。

「つぐみ先生」とよくお会いしたのは、東大の人類生態学教室だった。大塚柳太郎さんを訪ねたとき、ときどき、セミナールームでビールを飲みながら先生の御高説を賜った。ことに「儉約遺伝子型」のことなどは、おおいに御教示いただいたものである。その後、私自身も知ったかぶりで拙著などに書くことがあったが、それらは概ね、先生からの受け売りがベースとなった。さすがに教室では威厳にあふれる人で、なによりも大人であったから、たいへん多くのことを学ばせていただき、光栄のいたりである。

ときどき顔を出した生態人類学研究会でも親しくしていただいた。そこでの洒脱な御仁の貌がしのばれる。ひたすら飲み騒ぐ若輩者たちの傍らで、ニコニコしながら、つぼを究めたコメン

トをなさっていた先生の姿が、なんともなつかしい。

いちばん印象に残るのは、やはり囲碁会のこと。もの静かに打たれるが、とても強く、ともかく真正道をいくがごとき碁であった。そして、弱い私などとの碁を終えた後、あそこはこうだったね、ここはこうだったでしょう、と御指摘下さるのが常だった。先生が碁に目覚められたのは仙台に単身赴任されたときらしいが、私が犬山の霊長類研究所に単身赴任するとき、「単身赴任すると少なくとも2目は強くなるよ」という御言葉をいただいた。だが怠け者の私は、先生の有り難い御言葉に応ええず、あいかわらずの弱さである。

ギデラ族の村めぐり

河辺俊雄
高崎経済大学・地域政策学部

継美さん(鈴木継美先生)を隊長とするギデラ族の調査は1981年に行われた。7月17日9時過ぎに、パプアニューギニア西部州の州都ダルーから8人乗りのフォッカーに乗り、ギデラランドのモザイク状の森林・サバンナ・草原・河川を眺めながら、およそ15分のフライトの後、ギデラ族のウィピム村の飛行場に到着した。大塚さん(現国立環境研究所理事長の大塚柳太郎先生)が10年以上前から調査を続けているウォニエ村から、アシスタントをしているソコリが出迎えにきていた(ウォニエ村やソコリについては、大塚柳太郎著「トーテムのすむ森」(東京大学出版会、1996)を参照されたい)。ココナツのジュースをごちそうになってしばらくの休息の後、1:20にウォニエ村に向けて出発した。継美さんにとってはギデラの世界に入って、いきなり

の試練が始まった。飛行場のある村から隣村に行くだけとはいえ、かなり歩かねばならず、休みをとりながらようやく到着したのは5時を過ぎていた。早速、汗を流して一休みということになるが、内陸部なので水の流れの止まったクリークでの水浴びは、中に入ると底の泥が浮き上がってくるというものである。慣れれば水風呂気分ですれなりに快適なものではあるが、継美さんはタオルで顔や首を拭き、足を洗うにとどめて、水につかることはなかった。

ギデラ族はわずか1850人の人口ではあっても、村は4000km²(東京都の約2倍)の広大な土地に散在している。そして頼りとなるのは脚と腕、つまり内陸部では徒歩に頼り、河川地域ではカヌーを漕ぐ。村々を訪ね歩く私たちのパトロール調査も、とにかく歩くのである。継美さんも大塚さんも私も、麦わら帽子に地下足袋という姿で、これはすでに私たち人類生態チームのフィールドワークの定番となっていた。荷物を入れて運ぶ石油缶は、防水対策として丸蓋を付けて緑色に塗装した特別加工品で、突然の豪雨やカヌーでの運搬の時に絶大な効果を発揮した。しかし、このグリーン缶の運搬はなかなか大変で、現地の村人を雇って運んでもらうのだが、弓矢を持ち歩く生活をしている人たちなので、荷役仕事は嫌われる。

7月20日にウォニエ村を出発して、ウィピム村とカパル村を経由し、7月22日に北辺の村ルアル(その後の私の長期滞在調査村)に、何とか到着した。大塚さんが先頭で一行を引っ張り、私が最後尾のまとめ役として継美さんの後ろについた。継美さんが、「河辺はぺたぺたとうるさい」と非難されたが、これは死に至らしめるほどの強い毒を持つ黒蛇のパプアンブラックに咬まれないように、近くで見張って歩いていたためである。常に棒を持っていたのも、杖としてではなく、継美さんに襲いかかるとするパプアンブラックが出現すれば、たたき伏せるためであった。理解してほしかった。

継美さんは、約一か月におよぶパトロール調査を完遂した。その後、ギデラ族だけではなく、ノマッドや山地オクの現地調査も行って、「パプアニューギニアの食生活」(鈴木継美著、中公新書、1991)として調査内容をまとめた。

鈴木継美先生の思い出

佐藤 俊

筑波大学生命環境科学研究科

ある日、親しい同僚と飲屋で酒を飲んでいるときに、偶然、鈴木先生のことを話題にでた。彼は、私が先生を知っていることに驚きながらも、先生のことを畏敬の念をこめて語った。彼は、国立環境研究所から本学に異動してきたので、研究所時代に先生からうけた指導と恩義の数々を語るとともに、先生が環境学と保健学の分野では博識豊かなこわい大先生であることを語ってくれた。

これは、私には意外であった。確かに、鈴木先生には凜とした威厳が漂っていたが、私には気楽に付き合っていたように思うのである。

私は東大理学部の手助に着任してから、時折、先生の研究室に遊びに行くことがあった。そこには、大塚柳太郎さんをはじめとして生態人類学研究会の仲間も多くいるので気楽さを感じることができたからである。先生は、よく研究室の面々をつれて昼食を外食されていた。あるとき、ご一緒することがあって、天婦羅屋に行ったのであるが、はじめて天井というものを教えてもらって、口にした。今では好物となっている天井を食すると、鈴木先生を思い出すことがある。

その後、私は立教大学に異動したのであるが、

先生にお会いしたときに、何気なく池袋界隈で飲んでいることを話すと、「池袋には肥溜め電車とタヌキしかいないだろう」と茶化されたことも記憶に残っている。

この時期の失敗談がある。日本栄養・食糧学会が1983年5月に大阪で開催されたときに、ワークショップ「栄養生態学」で話題提供をするように依頼されたことがある。その会場で先生にお会いしたとき、ご婦人が連れ添っておられた。ひそかに先生に、ジュスチャーと目配せで邪推を伝えると、「バカ！俺の女房だ！」と喋られてしまった。

私が筑波大学にきて数年後に、鈴木先生は国立環境研究所長としてつくば市にこられた。そこで、同僚の西田正規さんと相談して、歓迎会と称して先生をお誘いしたところ、快諾していただいた。我々は飲屋で飲んだ後、西田さんが車を運転して先生を竹園の宿舎までお送りした。翌日、西田さんから、酔っ払い運転で捕まったという失敗談を聞かされて、泡を食ってしまったことがある。

さらに、鈴木先生には、私の所属している環境科学研究科の外部評価委員をお願いしたことがある。その折に、授業科目数を削減して分野を重点化すること、そして環境系教員の中核的教員団を育成することを提言していただいた。この提言は、博士後期課程の持続環境学専攻を2007年に新設したことで実現されている。

その後、先生にお会いすることはなく、人づてにご様子を聞くだけであった。しかし、京都の友人から伊谷先生の訃報を知らされたときに、私は、鈴木先生に真っ先に電話してお知らせした。このとき、先生は、電話口で一瞬の沈黙をなさった。今となると、これが、先生と最後にかわした会話ということになってしまった。

心から、鈴木先生のご冥福をお祈りいたします。

鈴木継美先生とコップ酒

須田一弘
北海学園大学

私は鈴木継美先生の門下ではなく、直接ご指導を受けたわけではない。時々、鈴木先生にお会いし、お声をかけていただいただけの私に、鈴木先生を語る資格があるとは思えないが、いわば部外者である私に、口調は厳しいながらも、優しく接して頂いた思い出をご紹介しますことで、先生のお人柄を偲ぶよすがになればと思う。

鈴木継美先生に初めてお会いしたのは、私が北大大学院修士課程に進学が決まり、生態人類学会の前身である生態人類学研究会に初めて参加した鬼怒川の温泉宿だったと思う。懇親会の席上、当時北大で助手をしておられた口蔵幸雄先生(現岐阜大学)に伴われ、先生にご挨拶をさせていただいた。私の自己紹介に鈴木先生は、「なんだ？口蔵の弟子だと。気持ち悪い奴だなあ」とおっしゃられた。文字にするときつい言葉だが、先生の目は優しく笑っておられた。口蔵先生も照れていらしたように思う。口蔵先生は、北大に就職される前のオーバードクターの時期に、東大理学部先輩であり、当時鈴木先生のもとで助教授をされていた大塚柳太郎先生をよく訪ねられていた。鈴木先生は、口蔵先生の就職を心配されていたようだ。就職が決まり、ほっとされたのだろう。

その後、鈴木先生と大塚先生が企画されていたパプアニューギニア調査の末席に加えていただき、しばしば東大人類生態学教室を訪れることがあった。打ち合わせが終わると、いつも飲みに行くために、大塚先生の仕事に区切りがつくまで教室の共有スペースで待っていた。

午後五時を過ぎると、仕事を終えられた鈴木先生が共有スペースに入ってくられ、私を見るたびに、「また来たのか、暇な奴だ。相変わらず馬鹿か。まあ、一杯つきあえ」といって、一升瓶とコップを持ってこられた。時々、学生や院生が出入りする中、鈴木先生にお相伴させていただいて、コップ酒を飲みながらとりとめもない話をさせていただいた。聞けば、いつも仕事終わりには一杯お飲みになってから帰宅するという。私がお相伴させていただいた時も、いつも一杯きゅっと引っかけると、「じゃあな、あんまり飲み過ぎるなよ」と言葉を残してお帰りになった。そのお姿は颯爽とされ、まるで仕事終わりに一杯ひっかけて帰る粋な職人を思わせた。鈴木先生のお言葉はいつもきつく、厳しかったが、それは先生の照れによるものだったのだろう。きつい言葉の裏には、先生のお優しさがあつた。鈴木先生の粋な飲み方に憧れたが、いまだに飲み出すと具合が悪くなるまで止められない私には、鈴木先生をまねるのは無理のようだ。

鈴木継美先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

鈴木先生を偲んで

高坂宏一
杏林大学総合政策学部

鈴木先生が亡くなられたとの知らせを受けた時、さまざまな思いが渾然と頭をよぎり、何とも言い難い深い悲しみに襲われた。先生に初めて御目にかかったのは、生態人類学研究会が京都で開催された折である。確か1970年代の後半で、初めてこの研究会に参加したときのことである。当時先生は東北大学公衆衛生学教

室の教授をされており、私は東大人類生態学教室の院生であった。宴会で座椅子をお譲りした記憶がある。どうしてこんなことを覚えているのだろうかと思うが、それほど強烈な印象を持ったということかも知れない。それ以上の記憶はほとんどないが、芸達者な方々が多く、宴会だけが楽しかったような感触が朧げに残っている。

その後私はインドネシア、スンダ農村の調査に行き、10ヶ月余り教室を不在にしたが、戻ると鈴木先生が人類生態学教室の教授として着任しておられた。1979年10月のことで、すぐに教授室に呼ばれ、調査のこと、今後の研究の方向のことなどを聞かれた。かねて聞き及んでいた‘厳しくこわい人’ではなく、穏やかな印象を持ったが、それはこの時だけであった。このあと1年半ほどして私は教室を出たが、お亡くなりになるまで、研究ばかりでなくさまざまなご指導とご恩を受けた。私は先生の研究に直接関わることにはなかったが、1980年代後半に参加したボリビア、アンデス高地の調査は鈴木先生が始められたものである。

先生は夕方になるとしばしば教室員と飲み、時に囲碁をされた。こうした時に吐かれる毒舌は慣れてくるに従って、物事の本質を突いていることがわかってきた。私たちの世代の院生は教室員にリングネームを付けて楽しんでた。メンタル誰々、ダーティー誰々などあまりいいものはなかったが、先生はダンディー鈴木であった。先生の表情や言葉は時に厳しかったが、とてもヒューマンでダンディーなお人であった。そして研究の良し悪しを見定める確かな眼でご指導くださった。ありがとうございます。心から鈴木先生のご冥福をお祈りいたします。

紫煙が似合った 江戸っ子ジェントルマン

武田 淳
佐賀大学農学部

学会や同窓会などへの出席や参加することから足が遠のいて年を重ねてしまった。そんな折り、鈴木継美先生が亡くなられたという訃報が届いた。晩年、病に臥していると小耳に挟んではいたが、お見舞いをする機会も失った非礼をお許しいただきたい。

フィールドを共にすることが少なかったので印象に残る思い出が、少なく非常に残念に思います。そして鈴木先生が元気なころの記憶に限られてしまいます。

1978年6月に起きた宮城県沖地震があった前年だったかと記憶する。当時、東北大医学部公衆衛生学教室の教授をされていた鈴木先生から頼まれて、東北人類学談話会で一度アフリカの話をしたことがあった。小生が1974年に琉球大学保健学部人類生態学教室に職を得てから、上司だった加納隆至さんが研究代表の科研費のプロジェクトで1975年と1977年に2度にわたって中央アフリカ・ザイールの熱帯降雨林に住むンガンドウ族の調査に出かけていたこともあり、彼らの食生態などの話をした。その頃のメンバーには、鈴木先生と同じ教室に竹本泰一郎さんや柏崎浩さん、歯学部解剖の葉山杉夫さん、文学部文化人類学の杉山晃一さんたちがいて、第一線でバリバリ仕事をされていた。

その後、東京大学医学部保健学科人類生態学教室に異動された後の鈴木先生のもとで、琉大から内地留学で勉強することになった。鈴木先生のところでは院生だった稲岡司さんや河辺俊雄さんがパプアニューギニアに調査に出かけているあいだ、本郷界隈の彼らの部屋を

間借りさせてもらい、アフリカの仕事をまとめる機会を得た。自分が直接指導するお弟子さんたちには結構、手厳しい鈴木先生でしたが、私のような外様もんには何かにつけていつも優しく寛大に接してくれる中にさりげなく上品に研究のアドバイスを授けてくれた。ラボ・ランチと呼ばれる実験とフィールド・スタディーの両方もやれる研究者が行う現地調査こそ、もっとも望むべき研究の姿なのだとかねがね言われておられたので、実験が不得手で参与観察を主体にした生態人類学者の私には耳痛い話でした。しかし、フィールドに長期間にわたって出かけ、帰国する教え子たちの成長ぶりに父親のように内心喜んでいる鈴木先生の心の暖かさには、まるで赤ちゃんを産んだ後の母親に自ずと母性が漂うかのような優しさと相通じる親性が感じとれました。

鈴木先生が何度か碁を打つ現場を見たことがあり、まっすぐに伸びた色白の指とその先に石を挟んでいたのが、とても綺麗だったと記憶している。碁を差す姿もタバコを吸われる風情もさることながら、酒席などでも酔狂に溺れず、実に紳士的に終始する姿勢はとても印象的で、きわどい話などに及べば、場をわかまえろと言わんばかりに冗談口をたたかれました。周囲に気をくぼる鈴木先生のごまかい気配り、思いやりに学ばなくてならないものが多々ありました。

自分を知る方々が一人また一人と鬼籍に入る知らせを聞くたびに命あるものに課せられたために人生のわびしさを感じるが多くなってきた。我が身も一日一日と齢を重ねる道を歩いているんだという現実と直面することになる。

もっとも自分の父親が亡くなられた齢をちゃんとクリアしたあとの鈴木先生から東京で聞いた話に、親父が亡くなった年齢まで自分がほんとに生き長らえるものかどうか、内実ヒヤヒヤするものだよと吐露されたことがあった。その鈴木先生もついに病魔に屈してしまい、天国に

おられる親父さんに「齢のノルマをちゃんと達成してから参りましたよ、お父さん」と鬼籍入りの挨拶をし、好きなキャビンをくゆらしているのかもしれない。

生前のご交誼に深く感謝し、心からご冥福をお祈りいたします。

追悼

田中二郎

今年で14回目となる生態人類学会の前身である生態人類学研究会はたしか25回ぐらい開催されたとおぼろげな記憶があるが、そうすると約40年前にこの研究会は発足したことになる。私たちの世代では、故原子令三、そして加納隆至、西田利貞、大塚柳太郎、武田淳、佐藤弘明、掛谷誠、市川光雄などが大学院生だった時代で海外でのフィールドワークを初めて経験し、意気盛んであったころのことだった。東京大学と京都大学から育ってきた若き研究者の卵を束ねられていたのは、東京大学理学部人類学教室の渡辺仁先生、京都大学理学部自然人類学研究室の伊谷純一郎先生に加えて、東京大学医学部保健学科におられた鈴木継美先生の3名の方々であった。初めは東大赤門前の学士会館分館や京大の動物学教室で20人前後が集い、フィールドから持ち帰った生々しいデータをもちよって長時間の議論を交わしたが、3回目ぐらいからは各地の温泉地を巡って合宿しながら研究会を催すようになっていった。年々参加者は増加し、研究会は質量ともに厚みを増すようになって、現在の学会組織となるにいたった。この研究会そして学会となった生態人類学研究を一貫して育て上げ、指導してこられた3人の先生方のうち、渡辺先

生、伊谷先生が逝かれ、そして、いままた鈴木先生を私たちは失ってしまった。生態人類学研究会だった古い時代に代わって、生態人類学会は新しい時代に踏み出していることを切々と感じる。

鈴木継美先生は、いつも会場の前方に座をしめられ、保健学や衛生学、栄養学などの専門分野を超えて真摯なそしてときには辛辣なコメントを述べられた。研究発表会を終えて温泉につかった後は盛大な宴会があり、いつまでも飲酒団欒を楽しむ一団がある一方、同好の士は碁盤を囲んでやはり深夜まで対戦をおこない、鈴木先生はいつも後者のグループの中で囲碁を楽しんでおられた。

生態人類学会の生みの親、そして育ての親のおひとりであられた鈴木継美先生の訃報に接し、長年のご指導に対しお礼を申し述べるとともに、心よりご冥福をお祈りします。

ツグミさんと生態人類学研究会

寺嶋秀明
神戸学院大学

鈴木先生のことは、みんなどういふわけか「ツグミさん」と呼んでいた。それが「継美」という難しい漢字であることは後になってからわかった。1973年、私が大学院に進学したとほとんど同時期に東大の理学部、医学部系の人類生態学の人々と京大の自然人類学の人たちが集まって、「生態人類学研究会」なるものがスタートした。第1回目は東京の学士会館で開催したそうだが、私はそれには参加していない。2回目は京大の理学部でおこなわれた。これには出たはずである。どこか薄暗い教室とおぼしき

場所で、それほど多くはない人数が集まってなんかぼそぼそやっていたという光景がおぼろげな記憶として残っている。自分自身積極的に参加したとはとても思われない。東京から来ていた人もさだかではない。ツグミさんがいたかどうかともわからない。

その次の年から突然、生態人類学研究会は「温泉で開催する」という規約ができたようである。ツグミさんの記憶が少しはっきりし出すのはこのあたりからである。参加者は30~40人くらい。旅館の大きな座敷にテーブルを並べて会場が作られた。当時の発表は時間もいたってルーズで、1時間あるいはそれ以上、スライドを映しながら熱弁をふるう人もいた。聴衆は疲れてくると、ざぶとんを枕にして畳の上に横になってスクリーンを眺めるなど、お行儀の悪いこと甚だしい。そんな中で、いつも右側最前列あたりにあぐらをかいたツグミさんがいて、きっちりと発表を聞き、しばしば厳しい質問を浴びせていた。左のほうには正座姿の伊谷さんがいて、立ち往生した発表者の援護をしたりしていた。発表者と両長老の真摯でアカデミックなやりとり、温泉ぼけ・宴会ぼけの頭にも一瞬、緊張が走ったものである。

発表のときには厳しい顔の多いツグミさんであったが、宴会やその後の囲碁大会ではいたってにこやかな表情にかわって楽しんでおられた。囲碁大会の横綱は別格に強かった原子さんだったが、ツグミさんは大関くらいだったと思う。はじめは2子あたりで教えてもらっていたと記憶する。そのうち先になり、互先になったあたりで、ツグミさんが生態人類学研究会にこられなくなった。そのころには生態人類学研究会(もうすでに生態人類学学会になっていたかもしれない)も、参加者が100名あるいはそれ以上となり、大広間でごろ寝スタイルで、という感じではなくなっていた。発表もきびしく時間制限がかけられるようになっていた。温泉開催という最後の一线だけは踏襲されていたが・・・

私にとってツグミさんは、今となっては古きよき思い出の「生態人類学研究会」そのものといった先生であった。伊谷さん、原子さんとともに今日の生態人類学の基盤をつくり多くの研究者を育てられた。学問を愛し、弟子を愛した人である。杯片手に、微笑んでいる柔和なお顔はわすれられない。

自分が如何に阿呆であるか

中澤 港
群馬大学

鈴木継美先生に初めてお会いしたのは、学部2年生のときの保健学概論の中での人類生態学の講義だったのですが、ポピュレーションケージでのマウス個体群の人口と行動の分析の話から、パプアニューギニアのストリックランド川の魚の水銀の話やボリビアのオンコセルカの話に至るまで、ダイナミックな人類生態学の面白さを語られたことが印象に残っています。ぼくは元々小学生のときに有吉佐和子『複合汚染』を読んで環境問題を解決することに寄与する研究者を目指して大学に入ったので、人類生態学教室の存在は以前から多少は知っていたのですが、継美先生の講義の迫力にヤラれて、すっかり人類生態学の虜になってしまいました。

とはいえ、すぐに研究室に入ったわけではなく、その後、学部3年になって人類生態学の講義があった際に、当時助手だった門司和彦先生（現在は地球環境学研究所の教授）に卒論をやるにはいつから研究室に行っていいますか？ とアホのような質問をして、いつでもいいよというご返事をいただいて、漸く人類生態学教室の門を叩くに至ったのでした。継美先

生は、開口一番「で、おまえは何をやりたいんだ」と訊かれるので、「複合汚染を調べたいので、複数の毒物の条件の組み合わせが生物に与える影響を調べたいです」と答え、「毒物って」というお尋ねに「農薬とか有機溶媒とか」と答えて「人類生態では微量元素は測れるけれども今は有機物を測る機械はないよ、それに農薬とか有機溶媒とかっていってもとんでもない多くの種類があって、もっと絞らないと実際の研究はできないだろ」と言われて自分の甘さに気付かされ、「生物って何を使おうと思ってるんだ」とのお尋ねに「水槽で鯉を飼って調べたいと思っています」と答えたところ、「そんな研究は50年も前に終わっている」と言われてペしゃんこになってしまいました。今にして思えば、あのお言葉は encourage であって、研究をするなら行き当たりばったりではなくて、ちゃんと先行研究を調べてから考えなくてはいけないし、魚への環境由来の毒物投与では厳密な濃度管理がほとんど不可能なので50年前レベルの粗い研究しかできないことを含めて教えられたのだとわかるのですが、当時の自分はただ落ち込んでしまっただけでした。けれども、ヒトのナマの暮らしを丸ごと、環境とのかかわりの中で捉えるという人類生態学の方法論としての有効性には間違いがないと思えたので、そこから人類生態学の方法を一つずつ学ぶ生活が始まりました。

微量元素の測定を含む実験もしていたのですが（中でも分液漏斗の正しい振り方を鈴木先生自ら教えてくださった日のことは、いまでも覚えています）、ヒトが適応しているかどうかを示す究極の指標の一つである人口の分析を先に学ぼうと、4年生のときは安定人口モデルを学び、その改良に取り組みました。十数冊の本と数百本の英語の論文を読んで数式を理解するという難事を何とか乗り越え、世帯構造を組み込んで改良した安定人口モデルをコンピュータプログラムとして完成し、その結果を使っ

て卒業論文を書き上げたのは4年生の冬、1月2日のことでした。提出期限は1月15日頃だったと思いますが、とにかく残された時間がありません。そこで血迷ったぼくは、1月3日に先生のご自宅まで論文を持って行って添削していただくという暴挙に出ました。もちろん自力で書いた論文など穴だらけで、「もっと早く持ってこんか」と叱られました。しかもコンピュータプログラムによるシミュレーションでは、何度実行させても数十年で日本人口はゼロになる、つまり日本人が絶滅してしまうという結果になってしまう「トンでも」でした。これではダメですね、と落ち込んでいたぼくに、継美先生がかけてくださったお言葉が、「卒論なんてのは、自分が如何に阿呆であるかがわかればそれでいいんだ」という至言でした。あれでどんなに救われたことでしょう。卒論に限らず、研究は、成果が出るのは10のうち1つくらいですが、それでも全力を尽くしてやってみなくては始まりません。そこに挑む勇気をいただいたのが、あの継美先生のお言葉でした。

修士2年で初めてパプアニューギニアに行ったとき、どの村でも村人から「オールドマン・スズキは元気か？」と尋ねられて、いつかはフィールドにも一緒に行きたいと夢見ていたのですが、当時は人類生態学教室が属する東京大学医学部保健学科の改組などもあって、継美先生は大変にお忙しく、叶わぬままになってしまったことが今でも心残りです。その後も学会や同窓会などを通して本当にたくさんのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。

鈴木継美先生にお会いした頃

西田利貞

鈴木継美先生に最初にお会いしたのがいつのことだったか、よく覚えていない。東大人類学教室が初めて助手の公募をした1969年に、私は幸運にも職を得た。12月中旬から採用になり、初仕事は亡くなったばかりの長谷部言人先生の名誉教授室の掃除だった。そのご褒美に、形見の立派な本箱を主任教授の渡辺直経先生より頂戴した。

どこでもそうだが、助手に専用の居室があるわけではなく、私はどれか研究室を選ぶようにいわれた。当時の人類学教室は二講座の規模で、形態学、機能形態学、先史学、遺伝学、生態人類学の5つの研究室があった。私の研究にいちばん近い分野は生態人類学だったので、理学部2号館3階の322号室という大部屋を選んだ。

そこは、博士課程の原子令三氏(故人、後に明治大学教授)、修士2年の大塚柳太郎氏(現在、環境研究所理事長)1年の武田淳氏(現在、佐賀大学教授)の居室で、研究生の葎田光三氏(現在、日本大学教授)、遺伝研究室に籍を置いていた博士課程の豊増翼氏(故人、後に帝京大学教授)、安田講堂の決戦で捕まり拘置所から出てきたばかりの岩野(島)泰三氏(現在、アイアイ・ファン代表)らが入り出していた。ここは、東大闘争のスト派の拠点(?)の一つだったらしい。

「生態人類学」という名称は、渡辺仁先生(当時助教授)が日本で初めて名乗った学問名称であった。仁(じん)先生は紛争とは関係なかったらしいが、「院生を甘やかした」ということで、他の教官から批判を浴びていた。しかし、私の見たところでは、学問にもものすごくまじめな先

生で、たまに部屋にこられると、私たちに話す余裕を与えず、1時間ばかり、興味が尽きるまで話しまくって帰られるのであった。

さて、大塚君は4月になると医学部保健学科の人類生態学研究室の助手になった。彼は他学部の学生ながら鈴木先生の講義を聴いていて、先生に気に入られたらしい。思い切った人事をなさる先生がいるものだと感心した覚えがある。こうして、大塚君を訪ねて人類生態にいったとき鈴木先生を紹介してもらったわけである。コーヒーをご馳走になりながら、碁を打ってもらったことも多い。私が先手で打っていたが、負けたほうが多かったと記憶する。

先生は公衆衛生学から生態学へと分野を開拓されつつあった時代で、動物生態学からも得られることがあると覚えておられたのだろう。チンパンジーの話をも、興味をもって聞いてくださり、私に目をかけてくださることも多かった。大塚君とともに自宅に招かれ、奥様の手作り料理をご馳走になったこともある。さすがに女子栄養大学教授だけあって、お料理には舌鼓を打った。

先生が招待を受けた公衆栄養学という研究会に私も紹介してくださり、講演させてもらったこともある。私の人類学教室の任期は三年であった。それが切れようとする頃には、先生は教授として東北大学へ転出された。先生は親身になって、私の就職先を探してくださった。そのうちに、主任が私を講師に昇格させてくれたので、任期の件は沙汰済みになった。

私が幹事を務めて本郷で開いた第一回の生態人類学研究会に鈴木先生が参加されていたかどうか思い出せない。しかし、少なくとも数年後には常連となられ、最も活発に発言する会員になられた。

私が最も充実した研究生生活を送った東大での18年間一おもえば、鈴木先生から受けた恩恵は大きく、温顔とともに大きな笑い声が今も聞こえてくるようだ。

追悼

野原忠博

鈴木継美先生のあまりにも早い彼岸への旅立ちに愕然としながら、今もってその現実を受け入れることが出来ない思いです。充実した華麗な人生で我々に多くの示唆を与えながら一気に通り過ぎられたという実感です。

先生から親しく声をかけていただいたのは1965年に鳥取で開催された民族衛生学会の懇親会だと記憶しています。すでにその頃は西の青山(岡山大学)、東の鈴木と称されるほど産業保健の分野で活躍されていました。その後、先生の研究は人間環境系へと拡大深化し人類生態学の体系化に取り組みされてきました。

人類生態学ノート、人類生態学の方法の御著書は多くの研究者の原典となったことは周知の通りです。本学会の設立から運営に至るまで故伊谷純一郎先生とのご協力が偲ばれます。

順風満帆と見られた先生にも偶然があったことも事実です。東北大学の教授選考に某先生が推挙されたとき誰もがこれで関係の無いポストと認識しました。しかし、某先生の辞退によって、結局鈴木先生がその後を引き受けられることになりました。在任8年間に精力的な研究成果が次々と発表されましたが、日本を代表する公衆衛生学者が先生の教室から巣立っていかれました。

先生が仙台に赴任された翌年から8年間私も琉球大学保健学部に赴任しました。沖縄でも先生にご指導賜り感謝しております。しかし、沖縄の8年間の終わりの頃、先生が来沖された際、思いもしない失敗をしました。当学会の学会長を務められた加納隆至、武田淳の両先

生と鈴木先生たちと夕方 7 時にお会いする約束をしました。沖縄の生活習慣に慣れ親しんだ我々は、自宅で一風呂浴び、夕食を済ませて出かけて、鈴木先生達が夕食前であることに気が回りませんでした。酒を飲んで議論をしているうちに時間がたってしまいました。その後、その時のことは、とうとう先生に弁解することも無く過ぎてしまったことが、今となっては悔やまれます。

先生のご冥福を心から祈っております。
合掌。

研究への真摯な態度を教わった

門司和彦
総合地球環境学研究所

鈴木継美先生との何か洒落た面白いエピソードでも書こうかと思ったが、どうしても真面目なものしか書けない。いろいろ思い出はあるはずなのだが、つまらない話でご容赦願いたい。

私が東大医学部保健学科人類生態学教室で卒論の研究をはじめたのは 1975 年。人類生態学教室ができて 10 年目のことである。助手の大塚柳太郎さんのはじめての卒論生だった。大塚さんは夏から 12 月頃までボリビアで調査をするから「勝手になんかやっておくように」とのことで調査候補地をいくつか紹介してもらった。その時のボリビア隊の隊長が当時、東北大学公衆衛生学教室の教授だった鈴木先生で、「怖い先生」という評判であった。

翌年なんとか卒業し、人類生態学の研究生になってヨーロッパ・中央アジアで漫遊した。その後、他の分野に進もうとして失敗し、1978 年に人類生態学教室の修士課程に入って鈴木庄亮・五十嵐忠孝・高坂宏一さんらのインドネ

シア西ジャワ調査隊に参加させてもらった。

修士に進んだとき教授ポストは空席だった。人類生態学の教授は鈴木先生以外にいないとも言われたが、研究上ダメなものは先輩でも同僚でも容赦なかった鈴木先生が東大に戻るのを煙たがる勢力も多かった。これを説得してまわったのは長崎大学に就任してまもない竹本泰一郎さんだったという。これが功を奏し 1979 年の春から鈴木先生が人類生態学の教授に着任された。そういうこととは無頓着に私はフィールドワークで好きなことをやってその年の 9 月末にジャワ島から戻ってきた。

戻って来てからは大変だった。11 月に原稿用紙 60 枚程度書いて見ていただいたが、最初の 1 ページ見てもらうのに 1 週間ぐらいかかった。「人間生態系」とは何かというところで話が止まって、説得できなかったので全部書き直しということになった。それから文章を書いては議論し、論破されては再度データを分析して書きなおし、また玉砕することを繰り返した。最後は大晦日までわざわざ出勤していただいた。教室の河辺さんや稲岡さんにも色々と助けてもらった。鈴木先生に文章を見てもらう時はいつも緊張するのだが、怖いという気持ちは毎日やっていると同様麻痺してくる。怖いには怖いのだが、それは当たり前で嫌ではなかった。研究に対する真摯な気持ちと、いわく言いがたい愛情があったからだと思う。誤魔化そうとしたり手抜きをしたりするとひどく怒られるのだが、素直にデータから何かを読み取ろうとすることにはいつも協力し応援して下さった。色々学内外の役職もあって忙しかったろうが、学生や若手研究者の論文の添削指導にはいつも熱心に取組まれていた。

修士の最後の年から博士 3 年と助手 4 年間、人類生態学教室に籍をおき、研究者としての基礎を教えていただいた。それに十分に報いることもなく馬齢を重ねているという忸怩たる思いは如何ともし難いが、鈴木先生が言われて

いた「生態学的健康観」に基づく「人間集団の健康と生存を保障する人間生態系の保全」のあり方を地球研のプロジェクトのなかで考え、具体的成果を出していきたいと思う。

鈴木先生は、生態人類学研究会が好きだった。それは、医学・公衆衛生学から出発された自分の限界を乗り越えようとする努力にも思えた。弱点の少ない方だったが、強いて言えば「素直なバカ」が好きなのが欠点だといえば欠点であり、また、魅力でもあり、我々にとっての救いだった。小賢しい議論や流行を表面的に追うような研究には冷淡だった。生態人類学が、環境と人びととの関連の「素直な観察」を出発点としている点が、好きだったのだと思う。それが人類生態学にとっても重要だということを理解されていた。

生態人類学も人類生態学も「素直な観察」だけに甘んじてはいけないのだろうが、それが原点であることは不変であろう。原点を保ちつつ、そこから新たな研究の地平を切り開くことを、鈴木先生はいつも目指していたのだと思う。

生態人類学会ニュースレター14号 [別冊]

鈴木継美先生追悼号

2009年3月10日発行

学会ホームページ URL:

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/ecoanth/>

学会専用メール : ecoanthro@nifty.com